

ご利用の手引き



本教材「実習に役立つ看護コミュニケーション：高度なコミュニケーション」は、コミュニケーションに関する授業や、実習前の患者さんとのコミュニケーションのイメージをつけ準備する時や、実習前だけではなく実習中の患者さんとのコミュニケーションについてディスカッションする場面で教材として活用できる内容となっております。

第1巻では、初めて患者さんを受け持つ場合の看護面接場面を想定して構成していますが、第2・3巻では、実際に患者さんを受け持ち、ケア提供時のコミュニケーション場面を想定しています。また、場面では成人看護学実習と設定していますが、患者さんとコミュニケーションをと

り看護過程を展開する基礎看護学実習や、老年看護学実習などにおいても共通する場面になっています。

実習中に患者さんからケアを拒否される場面や、学生では対応が難しいセクシャリティの問題や、経済的な問題、複雑な家庭環境などに遭遇することは少なくありません。第3巻では学生が実習をすすめる中で遭遇すると考えられる対応困難な場面での高度なコミュニケーションについて具体的に示しています。第2巻の良好な関係を構築するために、患者さんから表出された感情に対応するための技術（NURS）と合わせて視聴することで、理解がより一層すすむと考えています。

コミュニケーションは技術です。知識を持ち合わせているだけでは、実際に使うことができません。学生が看護実践現場でどのように活用するのかをイメージし、実習でその技術を使ってみることが技術修得の鍵と言っても良いでしょう。

ここでは、本教材の構成に沿った授業での活用方法を紹介します。

監修者：篠崎恵美子

本教材の構成

- 1 イン트로ダクション（本教材の内容の概要を簡単に説明）
- 2 CASE-1 脳梗塞回復期 右片麻痺と構音障害のある患者とのコミュニケーション
- 3 CASE-1 脳梗塞回復期 適切なコミュニケーションを考えてみよう！
- 4 CASE-2 がん周術期 人工肛門造設術を受ける患者とのコミュニケーション
- 5 CASE-2 がん周術期 適切なコミュニケーションを考えてみよう！

授業での活用方法

成人看護学などで、障害を受容していく段階での患者さんとの コミュニケーション技法などを教授する場合

- 4 CASE-2 がん周術期 人工肛門造設術を受ける患者とのコミュニケーション
- 5 CASE-2 がん周術期 適切なコミュニケーションを考えてみよう！

人工肛門造設術を受ける患者さんと学生のコミュニケーション場面を通して、障害を受容していく段階のコミュニケーション技法をイメージすることが可能です。

成人看護学・老年看護学などで、構音障害のある患者コミュニケーションや 気持ちに寄り添ったケアを提供することなどを教授する場合

- 2 CASE-1 脳梗塞回復期 右片麻痺と構音障害のある患者とのコミュニケーション
- 3 CASE-1 脳梗塞回復期 適切なコミュニケーションを考えてみよう！

右片麻痺と構音障害のある患者さんと学生のコミュニケーション場面を通して、構音障害のある患者さんとのコミュニケーションや気持ちに寄り添ったケアの提供などをイメージすることが可能です。

患者さんを受け持ち、看護過程を展開する実習や 領域実習前のオリエンテーション時に使用する場合

- 2 CASE-1 脳梗塞回復期 右片麻痺と構音障害のある患者とのコミュニケーション
- 3 CASE-1 脳梗塞回復期 適切なコミュニケーションを考えてみよう！
- 4 CASE-2 がん周術期 人工肛門造設術を受ける患者とのコミュニケーション
- 5 CASE-2 がん周術期 適切なコミュニケーションを考えてみよう！

受け持つ患者さんと照らし合わせることで、患者さんとの対応に関するカンファレンス時に活用ができたり、実際に実習中にどのように対応していくのかを具体的にイメージできます。

さまざまな授業形態を想定して、本教材の活用方法をご提示させていただきました。

また特典資料のワークシートの利用や授業計画案を参考にさせていただくことで、患者との良好な関係構築やコミュニケーション技術修得はさらに深まります。

本教材がコミュニケーション教育に携わる方、学生の皆様の一助になれば幸いです。

※ 第3巻は、カンファレンスなどでのご活用や実習中に遭遇しやすい対応困難な場面で参考になる高度なコミュニケーションの技法を理解・イメージするための教材となっております。各領域の実習前や卒前教育のディスカッションなどにご活用いただくため、「学習指導案」は作成していません。

ワークシート

視聴前

【CASE-1】()内にあてはまる言葉を入れましょう。

脳梗塞の後遺症などにより、発語機能に障害がある場合のコミュニケーションのポイントは以下のとおりです。

- (①) を正し、発声しやすくする、クッションなどで姿勢を安定させ (②) できる環境を整える
- (③) 質問技法を活用し、(④) なく、(⑤) 話してもらおう
- 話が進まなくても (⑥) しない
- 必要に応じて (⑦) (⑧) などのコミュニケーションツールを活用する
- コミュニケーションツールを利用するときは、一度に多くを話すのではなく、(⑨) 会話を重ねる方がよい
- 患者さんの発語による (⑩) を軽減しながら、気持ちや意思を確認する

【CASE-2】()内にあてはまる言葉を入れましょう。

手術を受けるがん患者さんの心理状態はとても (①) です。

そのような状況でのコミュニケーションのポイントは以下のとおりです。

- 患者さんの話を (②) する
- 話の中で有用な (③) を得る
- 抽出した看護問題については (④) に考える
- (⑤) などの話を促進する技法を活用する
- 自分が患者さんの立場であったらどうであろうかと (⑥) で理解を示す
- 患者さんから (⑦) が表出されたら、(⑧) を活用して速やかに対応する
- 患者さんの感情、特にネガティブな感情をキャッチしたときには、その気持ちに (⑨) することが大切である
- 患者さんからの情報は学生一人では対応できないため、(⑩) し情報を共有する

ワークシート解答

視聴前

【CASE-1】()内にあてはまる言葉を入れましょう。

脳梗塞の後遺症などにより、発語機能に障害がある場合のコミュニケーションのポイントは以下のとおりです。

- (① **姿勢**) を正し、発声しやすくする、クッションなどで姿勢を安定させ (② **リラックス**) できる環境を整える
- (③ **閉ざされた**) 質問技法を活用し、(④ **短**) く、(⑤ **ゆっくり**) 話してもらう
- 話が進まなくても (⑥ **イライラ**) しない
- 必要に応じて (⑦ **文字盤**) (⑧ **筆談**) などのコミュニケーションツールを活用する
- コミュニケーションツールを利用するときは、一度に多くを話すのではなく、(⑨ **短く**) 会話を重ねる方がよい
- 患者さんの発語による (⑩ **ストレス**) を軽減しながら、気持ちや意思を確認する

【CASE-2】()内にあてはまる言葉を入れましょう。

手術を受けるがん患者さんの心理状態はとても (① **複雑**) です。

そのような状況でのコミュニケーションのポイントは以下のとおりです。

- 患者さんの話を (② **積極的傾聴**) する
- 話の中で有用な (③ **情報**) を得る
- 抽出した看護問題については (④ **一緒**) に考える
- (⑤ **沈黙・うなずき**) などの話を促進する技法を活用する
- 自分が患者さんの立場であったらどうであろうかと (⑥ **共感的態度**) で理解を示す
- 患者さんから (⑦ **感情**) が表出されたら、(⑧ **NURS**) を活用して速やかに対応する
- 患者さんの感情、特にネガティブな感情をキャッチしたときには、その気持ちに (⑨ **対応**) することが大切である
- 患者さんからの情報は学生一人では対応できないため、(⑩ **看護師などに報告**) し情報を共有する